

理論があって経験があるのではなく、経験があって理論がある ～「観察の理論負荷性」の問題点

2019年12月31日 宮国淳

(2020年1月2日 一部修正)

<http://miya.aki.gs/mblog/>

※ 本レポートの内容を引用される場合は、
出典の明記をお願いいたします。

本稿は、科学哲学における「観察の理論負荷性」という見方の問題点について指摘するものである。主に次の二点に関して具体的に説明していきたい。

- ① 「観察」という行為における言語と経験との位置づけに関する誤認
- ② 理論あるいは因果関係とは何か、経験におけるそれらの位置づけに関する誤認

本稿では、以下の二つのレポート・論文の分析を通して「観察の理論負荷性」について論じていく。

(Ⅰ. 「観察」とは何か)

伊勢田哲治著「新科学哲学の主要人物の生い立ちと哲学」

http://ocw.nagoya-u.jp/files/45/sp_note07.pdf

(Ⅱ. 観察の積み重ねの結果としての全体像を観察の前提として扱う誤謬)

住政二郎著「質的研究の科学性に関する一考察」『より良い外国語教育研究のための方法』外国語教育メディア学会 (LET) 関西支部 メソドロロジー研究部会 2010 年度報告論集 30: 30~44 ページ

<http://www.mizumot.com/method/sumi.pdf>

・・・住氏の論文については観察の理論負荷性にかかわる部分のみを分析させていただいた。当論文における設問、

なぜ、質的に行為の意味を理解する必要があるのか？ 量的に調べることはできないのか？ 質的に調べるのであれば、質的にしか調べられないものがあるはずで、それは一体何なのか？ (住氏、31ページ)

・・・に対しては、量的に分析するデータがないからである、一回性の出来事において量的に分析しようがない、「質的」とは結局のところ一回性の出来事の経緯をもとに行われる因果推論であるにすぎない、その因果推論、つまり事実関係把握を「意味」と呼んでいるが「意味」という具体的事象などどこにもない、「意味」という言葉を持ち出せば科学的客観性の問題がスキップできるというわけではない、とここで

は答えておく。

量的にデータが取れる事柄もあれば、一つの事例の様々な要素を調べ、それらの連関を推論していくやり方もある。ただ因果関係の“客観性”とはあくまで恒常的相伴、つまり再現性によりもたらされるものなのであって、ただの因果推論に必然性を認めることは難しいのである（だからといって間違いであると決めつけることはできないが）。

この問題については、拙著

『社会科学と社会政策にかかわる認識の「客観性」』第Ⅱ部の批判的分析 ～意義・価値理念と事実関係、法則と個性的因果連関、直接に与えられた実在と抽象に関するヴェーバーの誤解

http://miya.aki.gs/miya/miya_report23.pdf

・・・で詳細に論じているので、参考にしていただければ幸いである。「意味」とは何か、という問題も扱っている。「意味」というものも結局は事実関係に還元されるものである。

また、因果関係や言葉の意味などについては、

ヒューム『人性論』分析：「関係」について

http://miya.aki.gs/miya/miya_report21.pdf

・・・で、言葉と個別的経験との繋がりから、認識の客観性へのプロセスに関しては、

経験とは？経験論とは？

http://miya.aki.gs/miya/miya_report19.pdf

・・・で詳細に論じている。

<目次> ※()内はページ

- I. 「観察」とは何か (3)
- II. 観察の積み重ねの結果としての全体像を観察の前提として扱う誤謬 (6)
- III. 言葉と経験との関係は、究極的に理論・論理で説明できないところへ行きつく (9)

I. 「観察」とは何か

伊勢田氏は観察の理論負荷性について、次のように説明されている。

観察の理論負荷性とは観察というものが成立するためには不可避的に背景にある理論に依存せざるをえないという性質である。この性質はいくつかの側面をもつ。まず、何が見えると期待するかによって見えるものが左右される。たとえば天王星の発見までに天王星らしき天体は何が、新しい惑星の存在を予期していなかった天文学者にはそれが惑星には見えなかった。さらに、必要な背景理論を持たない人にはある種の見え方はいない。X線管というものを知らないエスキモーの赤ん坊には、ある物体がX線管として見えることはない。第三に、理論から中立に見える観察も存在するが、それはさらに基礎的な部分で理論を共有しているからである。天動説論者と地動説論者がデータを共有しているように見えるのは、両者が天体とはどういうものかについての理論の一部を共有しているからである。最後に、二つの見え方の間で行き来するとき、その変化は徐々に起きるのではなく、ゲシュタルトスイッチという形で一辺に変わる。太陽が地平線から昇るように見えるか地球が自転して太陽が見えてきたように見えるかはそうしたスイッチの一例である。(伊勢田氏、2～3 ページ)

・・・この説明の問題点を指摘してみよう。

観察というものが成立するためには不可避的に背景にある理論に依存せざるをえないという性質である。

・・・ここで「観察」とは何なのであろうか？「天王星の発見までに天王星らしき天体は何が、新しい惑星の存在を予期していなかった天文学者にはそれが惑星には見えなかった」とある。しかしそれが惑星であると思わなくても、何かしらが見えていた場合もあるだろうし、気づかなかった場合もあるだろう。

ただ、もしそれが惑星であると知らずにそのものを見ていたのであれば、確かに何か見えていた、知覚経験として現れていた、ということなのである。ただそれが何か分からなかっただけで、それは見えていたのである。

「X線管というものを知らないエスキモーの赤ん坊には、ある物体がX線管として見えることはない」とあるが、X線管と知らなくても、そのものを差し出されればそのものは見えていたはずである（目が見える状態であれば）。また、ここでなぜわざわざ赤ん坊を引き合いに出さねばならないのだろうか？言葉を知らない赤ん坊には見えたかどうか伝達する術さえない。別に「X線管というものを知らない大人」でも良いはずである。

逆に考えてみよう。「天王星」という言葉があったとしても、それに対応するなにがしかを観察することができなければ、天王星にまつわる様々な仮説は実証されえない。X線管という言葉に対応するものをそこに観察できるからこそ、X線管というものは想像上のものではなく、現実に存在していると言えるのである。「何が見えると期待するかによって見えるものが左右される」とあるが、仮説に基づきそのものが観察されると“期待”されるとしても、それが実際に観察されなければその仮説が実証されたとは言えない

のである。

「必要な背景理論を持たない人にはある種の見え方はいない」とあるが、その“背景理論”を知ってなくても、それは見えている可能性がある。仮に気づいていない場合においても、これがそうであるよ、と教えればその人もそれを見ることができる、そうでなければその理論が客観性を持ちうるとはいえないであろう。その理論が事実として客観性を持ちうる、ということは、その理論を知っていない人でさえ、その用語やその理論に対応する現象・経験を“観察”できることなのである。

伊勢田氏の言われる「デジタルトスイッチ」についても、これはあくまで因果理解の変化であって、本当に見える光景の変化なのであるだろうか？ 伊勢田氏（そして科学哲学者たち）は、「観察」という行為における「言葉」の位置づけを見誤っているのではなかろうか？

ある言葉を知ることで、特定の事象・経験に対しそれを呼ぶ名前というものがあることを知ることで、特定の経験が現れるたびに、その言葉とセットとして連想してしまうようになる。つまり経験が言葉といやおうなしに繋がってしまう（さらに場合によってはその言葉と関連すると思われる他の様々な事象や感覚が付随して現れてくる）、ここが明らかに変化した部分なのであって、言葉が指し示している経験・事象そのものが実際に変化しているのかどうか、作り変えられるのであるか、常にそうであるか断言できるであろうか？

・・・結局は、その事象・経験が言葉で言い表される前と後での比較により検証される具体的事実ということになるのではなかろうか。

実感的な印象としても変化することがあるかもしれないし、しないことがあるかもしれないようにも思える。双方様々な具体的事例として説明できるように思えるし、常にそうであるのか断定することがいっただいできるのかどうかさえ疑問である。変化したようにも思えるししていないように思えるかもしれない。

いずれにせよ、結局は具体的に変化しているかしていないか、という話なのである。さらに言えば、ある言葉を知っていなかった頃の記憶がなかった場合（こういう事例は多いと思う）、かつての経験がどのようだったか思い起こせないのであるから、その言葉（概念？）を知ってから経験内容がどのように変化したか検証しようもない。

このような科学哲学における言葉と経験との関係に関する誤解が、現代にいたるまでの理論の“迷走”を引き起こしているように思える（「概念」という用語がこの誤解を助長しているとも思われるが、これに関しては拙著、「経験とは？経験論とは？」 http://miya.aki.gs/miya/miya_report19.pdf で詳細に論じている）。

以下、再び伊勢田氏の文章からの引用である。

ラカトシュが反証主義にクーンのパラダイムや通常科学の考え方を組み込んで提案するのが「科学的リサーチプログラムの方法論」(method of scientific research programme) である。ラカトシュの考えるリサーチプログラムはいくつかの要素からなる。まず、中心となるのは長期にわたって研究グループの中で維持される固い核 (hard core) である。ニュートンの三法則やプラウトの「あらゆる原子は水素原子の整数倍の質量を持つ」という命題など、科学者たちが変えようとしなない基本的公式や命題がここに含まれる。固い核はそれだけではテスト可能な予測を生まないの、さまざまな補助

仮説が必要となる。その集合を防御帯 (protective belt)と呼ぶ。予測が間違っていたとき、科学者たちは固い核を変えずに防御帯を変えることで対処する。これが消極的発見法(negative heuristics)と呼ばれるものである。消極的発見法には、単に固い核を変えないというルールだけでなく、できるだけ理論の経験的内容を増やすような形で防御帯を変えろというルールも含まれる。経験的内容が増えるというのは、具体的にはこれまで誰も予想しなかったような新奇な予測(novel prediction)を行い成功させるということの意味する(天王星の軌道の異常を説明するために海王星の存在を予測して発見するというのはまさにこの条件を満たす)。この条件を満たす形で防御帯を修正することを前進的推移(progressive shift)、なんら経験的内容を増やさない形で防御帯を修正することを後退的推移(degenerative shift)と呼ぶ。消極的発見法は後退的推移を全面的に禁止するわけではなく、ときどき前進的推移があればそのリサーチプログラムを維持するには十分であると考えられる。(伊勢田氏、8～9 ページ)

・・・同様の経験内容に基づき、異なる理論が考えられることがある。「ラカトシュはむしろ対立するリサーチプログラムが並立する方が科学の常態であり、科学の進歩のためにもものぞましいと考えていた」(伊勢田氏、9 ページ)、つまりそういう場合である。この場合、どちらが「正しい」といかに判断することができるのだろうか? 「アナーキズム」(伊勢田氏、11 ページ)はその説明を放棄したものである。伊勢田氏によるとアナーキズムはほとんど支持者を得ることがなかったそうだが、これまでの科学哲学の考え方ではアナーキズムのどこに問題があったのか、正確に指摘することもできないように思える。

・・・要するに、どちらが「正しい」のかの判断も結局は観察、観察という具体的経験よりもたらされるものなのである。上記の「積極的発見法」と同様である。対立する理論のどちらが「正しい」か、あるいはまったく別の理論が「正しい」のか、それを決めるのも新たな経験なのである。

「新奇な予測(novel prediction)を行い成功させる」とはいったいどういうことであろうか? これまでになかった仮説理論を構築し、それを検証するための具体的経験を探す。そしてそれが見つかればその「新規な予測」は成功したのである。それが見つからなければ失敗である。そして「だんだんモデルを細かくして観測値との整合性を高めて行くというやりかた」(伊勢田氏、9 ページ)も結局は観察による具体的経験がまずあった上で成立するものである。

もちろん、その「正しさ」は絶対的なものではない。一度「正しい」と思われたものが、その理論に収まらない新たな(観察による)経験により覆される可能性もあるからだ。しかし、いずれにせよ経験なくして理論の「正しさ」というものを決めることなどできないのである。

II. 観察の積み重ねの結果としての全体像を観察の前提として扱う誤謬

観察の背景に理論があるとか、中世力学における「インペトゥス」とニュートン力学における「運動量」という概念（というより用語）が同じものではない、別の意味をもつ別の言葉だと、言えるのはどうしてだろうか？ 何を根拠にそう言えるのであろうか？

・・・要するに、それらも一種の「経験則」なのである。それぞれの人たちにとっての言葉と経験・事象との繋がりがまずあり、それらが因果的につなぎ合わされることで、そういった経験則が導かれている。要するに経験の積み重ねなのである。

それらの経験測は、個別の経験がまず出発点にあって初めて築かれうるものなのだ。理論があって経験があるのではなく、(言葉と事象・経験とが繋がる)経験がまずあって、背景にある理論があるのでは・・・と理屈づけられているのである。

理論負荷性を主張する人たちは、次の事柄を混同してしまっている。

- ① そこに見えているものを「リンゴだ」と思った事実（言葉と経験とが繋がった事実）
- ② 「リンゴ」という言葉の由来、「リンゴ」という言葉をどのようにして知ったか
- ③ なぜそこに見えているものを「リンゴだ」と思ったのか、その理由
- ④ そこに見えているものが本当に「リンゴ」なのかという「正しさ」の問題

・・・②③④がいかようなものであれ、あるいはそれらを知っていようがまいが、①の事実には全く影響がない。関係ないことである。理論負荷性であろうがなかろうが、そのものを「リンゴだ」と呼んだ事実は、疑いようのないものなのである。言葉と経験のつながりが変化することがあるという経験則もまずはその事実から出発している。その事実が出発点になって初めて「理論負荷性」の議論が可能となっているのだ。

科学哲学において、言葉にまつわる個別的経験と、判断の客観性の問題とが混同されてしまっているのである。研究の結果であるものを前提とすり替えることであたかもパラドクスがあるかのように見せているだけ、それが観察の理論負荷性なのだ。

住氏は、観察の理論負荷性について、次のように説明されている。

私たちが、ありのままの客観的な、誰にとっても同じ世界を経験することは不可能だと考える観念論的世界観は、同じ事物を見ても、観察者の視点と意味づけ（解釈）によって、観察の内容（目に見えるもの）が異なるという身近な経験からも説明できる。これは「観察の理論負荷性」（ハンソン、1986）と呼ばれる。よく知られた例では、同一の絵が、観察者の視点によって、アヒルやウサギに見える多義図形がある。（住氏、33 ページ）

・・・“アヒルやウサギに見える多義図形”は有名であるが、これも**観察の結果としてもたらされる全体像を観察の前提ととりちがえているだけ**である。その絵を見て「アヒルの絵だ」と思った。もうちょっとしてその絵を見直してみたら「ウサギにも見えるかも」と思った。あるいは私は「ウサギの絵だ」と思って

いたが、隣にいる人が「これはウサギの絵だ」と言ったとする。もう一度その絵を見なおしてみたら「ウサギにも見えるな」と思える。

住氏がここで「監察の理論負荷性」と呼ばれるものは、ある視覚的経験と「アヒル」という言葉が繋がった事実、さらにはその視覚的経験と「ウサギ」という言葉が繋がった事実、それらの経験の積み重ねの結果としてもたらされた「アヒルにもウサギにも見える絵」という“全体像”なのである。

研究においてもそうである。ある研究者（研究者 A と呼ぼう）が特定の民族の調査をしてその民族のある特徴を強調したとする。次に別の研究者（研究者 B と呼ぼう）が同じ民族の調査をして、前の研究では見逃されていた別の特徴を指摘したとする。このような調査研究の積み重ねでその民族の全体像がより明確となってくる。

その時研究者 A の見解は完全なる間違いだと断定できるだろうか？ そうではないだろう。事実と乖離が見られなければその調査もまたその民族を説明する要素の一つであると言えるはずである。もちろん研究者 A と研究者 B との間で見解が対立する可能性もある。しかし一定の範囲内で同意できる事実把握もあるはずである。

特定の研究対象の一面しか見えていないことは、果たして「ありのままの客観的な、誰にとっても同じ世界を経験することは不可能」ということを示しているだろうか？ 他の研究により完全否定されなければ、その一面も客観的事実であることに変わりはない。ここで住氏は一面性と客観性との関係を見誤っているのだ。（事後的にそうだと知りうる）一面的認識も「ありのまま」（住氏、34 ページ）であることに変わりはないのである（もちろん絶対的真理であると言っているのではない）。

ここで間違っていないのであるが、研究者 A の調査結果しか知られていない時点において、その民族に別の側面があるのかどうかなどはまだ皆知らないのである（少なくとも研究者たちの間においては）。研究者 B の調査研究が明らかになって、初めてその民族の別の側面が知られるようになったのである。

つまりこういうことである。特定の対象の一面しか知られていない場合、その対象を見る人たちに「監察の理論負荷性」というものが関与しているのかどうか、そんなことは決まっていないのである。その対象に関する新たな側面を誰かが見つけて初めて、“私たちは一面しか見えていなかった”と知ることができるのである。

「観察者の視点と意味づけ（解釈）」というのはそれらプロセスからの“後付け”の説明であるにすぎない。その絵を見て「アヒルだ」と思った事実がまずある。別の人から「ウサギだ」と言った事実があり、私自身もその絵を見て「ウサギにも見えるな」と思えて、初めて「視点」というものがあつたのだと理解できる。「意味づけ（解釈）」においてもそうである。ただ私たちはその絵と「アヒル」という言葉とが繋がった経験をただけなのである。

そこで間違っていないのは、「視点」「観点」「価値観」そういったものを、独立した“何か”として実体化してはならないということだ。その対象と「アヒル」という言葉が繋がった事実において、それを介在する“何か”を独立したものとして実体化してはならない、ということである。

研究者 A が行った他の調査研究において、彼は他の民族において似たような特徴を指摘した、あるいは彼は誰かについて言及するとき、いつもその面を強調するとか・・・そういった彼の過去の様々な行為と、当研究とを関連づけた上で、彼の「視点」というものが因果的に導かれる。過去において彼はこういう傾向があつた、今回もそういった傾向によるものだ・・・そういった事実と事実との関連づけである。しかし関連づけられたのは彼の過去の行為と現時点における行為であり、そこに「視点」やら「価値観」

というものを“実体化”する根拠などどこにもないのである。あるのはどこまでも個別的事実、そしてそれらに関連づけたという事実のみである。

そしてそういった分析が可能になるのも、まずは視覚的経験と「アヒル」という言葉が繋がった事実、その視覚的経験と「ウサギ」という言葉が繋がった事実が出発点となっているのである。その具体的経験は、科学哲学者たちが「観察の理論負荷性」がどうか論じている場合においても、疑いえない事実として、その分析の出発点となっている。

上記私が示した②③④の分析も、まずは①の事実が具体的経験として現れた上で可能になっているのである。住氏が引き合いに出している“「ネッカーの立方体」(Necker Cube)“ (住氏、33～34 ページ)についても事情は同じである。

住氏は観察の理論負荷性に関して次のように結論づけている。

これらの例が指し示すことは何か？ これらの例は、人間の知覚と解釈は一体であり、私たちはありのままの客観的世界を直接的に認識することはできないことを裏づけている。世界は客観的事実の集合として私たちの前に「見える」のではなく、私たちの解釈、つまり意味付与のプロセスを経て「見えてくる」ものとして位置づけられる。これは、客観的世界が、主観から独立して、誰にとっても同じく存在するのではなく、多義性に開かれていることを意味する。村上(1979)は、『見る』ということは、人間=バケツが外から流れ込む情報を受動的に受け取る、というようなものではなく、むしろ、人間の側のもっている『理解』の能力を駆使して、能動的に何かを造り出す作業だ(p.165)と指摘している。この考え方が、観念論の基礎になる。(住氏、33～34 ページ)

・・・「客観的世界を直接的に認識することはできない」のは、それが、住氏の言われる「客観的世界」が様々な人たちによる「ありのまま」の観察が積み重ねられ因果的に構築されることで事後的にもたらされるものだからである。「ありのまま」に把握されるのはその時その時に現れる具体的事象・経験、そしてその言語的表現なのであって、“世界”あるいは全体像というものは、事後的に構築されるものなのである。

上記の住氏の見解（そしておそらく引用元の村上氏の見解）は、様々な個別的・具体的情報の因果的構築のプロセスと、個別的・具体的な「観察」という行為とを混同してしまったために生じた誤解なのである。それは「観念論」や「实在論」の区別の問題とは全く関係ないものだ。

一応、住氏が示したもう一つの事例についても分析しておく。

他には、ダヴィエルの開眼手術の報告もよく引用される。ダヴィエルは医師で、白内障の手術法を考案した。ダヴィエルの報告によると、先天性白内障で手術を受け、視力を回復した患者は、手術後すぐには何を見ても、形、大きさ、立体感はもとより色さえも区別することができなかった。そして、患者は一定の期間の訓練を受け、形、大きさ、および色をようやく認識できるようになった(池田, 1998, p. 45; 伊勢田, 2003, p. 78)。(住氏、34 ページ)

・・・これは科学的研究の結果で哲学的問題を説明する誤謬の一例である。では、この上記の研究はいかにして遂行されたのであろうか？ ダヴィエル医師が、患者を「観察」した上で上記の結論が導き出され

たはずである。患者も自らの視覚的経験を言語で表現し、ダヴィエル医師に伝えたはずである。人間の認知プロセスの科学研究も、まずは視覚的経験と言語との繋がりが出発点になっている。

住氏は「一定の期間の訓練」とされているが、それはいったいどんな訓練だったのだろうか？ おそらくであるが、ある物を指して「これはリンゴです」とか、色のついたパネルを見せて「これは赤色です」とか、そういったふうに視覚的経験と言語との対応関係を示していったのではなかろうか？

- ① 白内障の手術の後、すぐには見えず、だんだんと見えてくる事実
- ② 視覚と言語のつながりを覚える訓練

・・・この二つを混同してはならない。そもそも、私たちが言葉を使えるのは子どもの頃から様々な人たちに教えてもらってきたからである（因果的に考えれば）。わざわざ白内障の事例をここに挙げてくるのは論点がずれてはいないだろうか？

さらに言えば、色のついたパネルと「赤色」という言葉のつながりに「理論」というものが介在しているだろうか？ 視覚的経験（あるいはその他の様々な具体的経験）と言葉との繋がりに「理論」というものが介在しているだろうか？ そんなものなどおかまいなしに、まずは経験と言葉とが繋がったのである。理論とは、様々な経験と言語との繋がりを出発点として、それらを因果的に積み重ね構築した上で組み上げられていくものなのである。

理論があつて経験があるのではない。まずは（言葉と事象とが繋がった）具体的経験があり、そこから理論が構築されていく、理論の科学的客観性というものが検証されていくのである。

Ⅲ. 言葉と経験との関係は、究極的に理論・論理で説明できないところへ行きつく

「X線管」を知らない人にX線管の写真を見せ、これと同じものを探してくれないか、と尋ねたとき、それは常に不可能なことであろうか？ 実際にX線管がその人の身近にあったとすれば、それを探し当てることはできるのではなかろうか？ 何もX線管に限ったことではない。それが何なのか知らないがとにかく写真や絵（+そのものの名前）を示されれば、どこかで同じ（あるいは似たような）ものを見かければ、「先日見たあれだ！」と思ひ浮かべることは不可能ではないように思われる。

このとき、写真や絵で示された視覚的経験と言葉との関係は「理論負荷性」に負っているだろうか？ そうであると断言できるであろうか？

もちろん事後的に理屈付けをすることはできるのだが、そのものを「リンゴだ」と判断した事実、そこに見えているものと「リンゴ」という“言葉”が繋がった事実がまず先にあり、「なぜリンゴだと思ったのか」はその他様々な経験とをつなぎ合わせて事後的に因果的に考えられるものなのである。

繰り返すが、理由や背後にある理論などおかまいなしに、そのものを「リンゴだ」と思った事実がまず

先にある。その事実があって、はじめてその理由を問うことができるのだ。それは同一性においても同じことである。「同じだ」と思った事実があって初めてその理由を問うことができる。理由があって同じだと思ったのではなく、同じだ、と思って理由は後付けで因果推論されるのである。

ある人から「これは〇〇だよ」とそのものを指し示しながら教わった。次の日、別のところで「あっ、〇〇がここにもある」と思ったとする。果たしてその“理由”を完全に特定できるのであろうか？ もちろん色、形、そういった様々な要素を観察から抽出し、原因であると因果推論することはできる。しかし、その時において、果たしてその要素が本当に原因であったと断定できるのであろうか？

ひまわりを知らない人が「これはひまわりの花だよ」と教わったとする。ある時その花を実際に見つけて「あっ、ひまわりだ」と思ったとする。この時、ひまわりの何が「ひまわりだ」と思わせたのか、その色とか形とか、様々な要素を事後的に分析し因果推論することはできる。しかし究極的にどの要素がそうさせたのか、断定することはできるのだろうか？

別の方向から考えてみよう。それが本当に「ひまわり」なのか、その「正しさ」を検証するにはどうするであろうか？ 「ひまわり」を図鑑で調べる。花びらの形、たくさんの小さな花の集まり、葉の形・・・様々な要素を分析する。「ひまわり」であるという「正しさ」を証明するために、「ひまわり」にまつわる様々な要因を検証する必要がある。それらを（理論負荷性における）「理論」と考えることはできよう。しかし、それらの要素も「ひまわり」の先にあるのではなく「ひまわり」がまずあった上でその対象を何度も観察した上で事後的に分析されるものなのである。

そして、それら要素の分析も究極的に理論（論理）で説明できない場所へ行きつくのである。

拙著、**哲学的時間論における二つの誤謬、および「自己出産モデル」の意義**

(URL: http://miya.aki.gs/miya/miya_report17.pdf)

・・・で私は下記のように説明している。

言葉と（言葉の意味としての）経験との繋がり、究極的に論理で説明できない場所へ行き着く。青とは何か、と聞かれても、実際に青い色を指し示すしかない。あるいは自分で青い色を思い浮かべるしかない。青色を波長で説明できるかもしれない。しかしその分析には、実際に青色と人々が認める具体的事物があり、それを測定した上で波長との関係が見出せるのである。しかも波長とは何か、と聞かれればやはりそれも具体的な波形を描いたりして示すしかない。言葉の意味に対する説明を細分化・精密化したり厳密な定義を与えたりすることはできる。しかしそれらも究極的には論理で説明不可能な言葉と経験との繋がりへたどり着いてしまうのである。

しかし 論理で説明できないからといって、経験と言葉が繋がった事実、目の前のものを見て「リソゴだ」と思った事実は疑いようのない「現実性」を持つものなのである。（宮国、9 ページ）